

2026.02.26 自立支援協議会相談支援部会 活動報告資料

## 1.相談支援部会開催報告（1回実施）

①日時：令和8年1月21日（水）15時00分から16時30分

場所：区役所810会議室

協議内容：

- ・第3回自立支援協議会の報告
- ・各部会報告
- ・第4回渋谷区相談支援事業所連絡会の報告

テーマ「BCP・防災について」

⇒本年度より、企画や運営を区内相談支援事業所の皆さんにお願いして実施した。

特に今回のテーマは継続して話をしていく必要があるために来年度も内容をアップデートしたもので実施予定。

来年度も企画運営に区内相談事業所の皆さんに協力をいただき、連絡会を実施予定。

## 2.相談支援部会の中からでた課題

### ●児童の移動支援について

⇒特別支援学校校門からバスポイントまで（約5分）の移動のために利用希望があるが利用時間が短く、算定時間が15分以上となっているために受けていただける事業所がない

### ●港特別支援学校移転について

港特別支援学校が建替えのために移転予定。今よりも遠くなるために通学が難しくなる児童やバスポイント発着時間に変更になるなどサービス調整等が必要になる可能性がある。

【これまでに挙がっている課題で部会内でも再度上がってきた課題】

- 児童から成人への移行
- 保護者のレスパイト場所不足
- 中高生の放課後の過ごす場所がない
- 障害福祉サービス介護保険サービスへの移行

## 令和7年度第4回自立支援協議会 就労・日中活動支援部会報告

**1月15日（木）定例会**

さまざまな職場、事業所が参加して「就労」から「日中活動」までテーマを広げ行ってきた。年間の振り返りの中で多く出た意見は、自分の職場では聞けないことを話す機会が多くありそのことを持ち帰ることができた。異なる職種の方と知り合うことができた。事例の検討がよかった。などが多かった。

事例検討では、知的レベルが高い利用者が周りの利用者との関係性が上手くいかない事例を取り上げて意見交換を行った。

その他、就労選択支援について等の意見交換を行った。

**12月17日（水）くらしと仕事の相談会企画会議**

引続き継続して行いたいという意見が多く出ているが、当事者家族のニーズの再調査を行う。部会の取り組みとして行うかどうかも検討中。

2月17日に打ち合わせを行い、集まった情報を基に次年度この企画を実施するか、実施するのであればどのような形式で行うべきかの点を話合った。

**2月20日（金）高齢障がい連携会議****・テーマ「障がい福祉サービスから介護保険への移行時の課題2」**

第1回で行った障害福祉サービスから介護保険に移行する事例を取り上げる。

65歳到達の3か月前から、当事者が利用している障がい福祉サービス（就労継続支援B型）支援員、相談支援専門員、地域包括支援センター、ケアマネジャーそれぞれの立場から時系列によりどのように動くか、その場合の課題、必要な連携についての意見交換を行う。後半は引続きグループワークにより、本人家族の不安への寄り添い、支援者間の連携、高齢になっても自分らしい暮らしについて話し合う。

**来年度に向けて**

3月に今年度参加した方への意向調査を行い、来年度の部会メンバーと年間テーマを決める予定。

以上

## 令和7年度 第4回渋谷区自立支援協議会子ども部会報告資料

## 【第5回子ども部会開催報告】

日 時	令和8年1月8日(木)10時～12時
会 場	渋谷区子育てネウボラ6階会議室
参加者 (敬省略)	安藤(部会長／はあとぴあキッズ)、大久保(副部会長／渋谷なかよしぐるーぷ)、平柳(事務局／代々木の杜ピアキッズ)、平井(代々木の杜)、遠藤(渋谷区肢体不自由児者父母の会)、倉本(渋谷区重症心身障がい児者を守る会、自立支援協議会相談支援部会：岡野、笹森 渋谷区子ども家庭部子ども発達相談センター：小原、渋谷区中央保健相談所：鈴木 渋谷区教育センター特別支援教育係：田才

## 1. 「しぶや子育てネウボラ」との連携

子育てネウボラの各部署から、子ども発達相談センター、中央保健相談所、子ども家庭部保育課、代々木の杜ピア・キッズ、教育センターの担当者より現状の情報共有や意見交換等を行う。

※子ども家庭部保育課は出席の都合がつかなかったため、書面で回答をもらう。

## 中央保健相談所

- ① あかちゃんショートステイ・子どもショートステイの利用状況は増加傾向。障害のあるお子さんも利用実績あり。
- ② 東京都ベビーシッター利用支援制度の補助対象の時間数の増加、夜間や病児・病後児の利用が可能となり、活用度が高まる。未就学児・小学生ともに障害のある子どもも活用。
- ③ 医療的ケア児について、都の補助制度に則ってレスパイトの年間利用上限時間が令和7年度から倍になった。利用状況は、R6年度は延べ約1400時間、R7年度は12月までで約1900時間と利用状況は右肩上がり(乳幼児以外も含む)。医ケア児は増加しており、保育園に入園できず、在宅レスパイトを利用し、就労するケースが増加。
- ④ ショートステイ、ベビーシッター需要増加に伴い、更なるサービス提供体制の充実を期待したい。
- ⑤ 5歳児健診の目的は、子どもの特性を早期に発見し、適切な支援を行うとともに、生活習慣、その他育児に関する指導を行い、幼児の健康の保持および増進を図ること。小学校生活への準備ができることが期待される。
- ⑥ 渋谷区の出生数は、R4:1757人、R5:1608人、R6:1599人と減少傾向だが、支援に繋がらないケースが増加している印象はない。
- ⑦ 障がいや発達に困難さがあると思われる子どものいる家庭については、保健相談所で妊婦全数面談を実施し、早期からの情報提供が可能。早期から病院と支援機関が連携を図り、支援に繋げるといったケースも。発達の遅れについては、受容に時間がかかる方も含め、健診後の節目の時期に保健師がフォローし、相談に繋げている。

<p>子ども発達相談センター</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 未就学児の相談は、概ね例年同様の推移。初回相談後1割程度が親子グループに参加し、その後、約25%強が療育につながっている。</li> <li>② 園・学校等訪問支援事業「いんくる」では、これまでと同様に学校での支援が多い。今の時期は就学に向けた相談が多くなっている。</li> <li>③ 子ども発達相談センターで支援している医療的ケア児については、りばあさいど原宿と連携して引継ぎを実施。必要なケースについては継続支援を行っている。</li> <li>④ ベビーシッター利用支援事業については、障害児の受入がより充実すると良い。3歳未満の乳幼児の在宅支援については、「産前産後家事サポーター派遣事業」(※家事支援、妊娠中～3歳未満児の養育をする保護者対象)もある。利用が広がると良い。</li> <li>⑤ 5歳児健診については、健診実施に伴い、5歳児の相談増加が見込まれ、就学に向けた繋ぎ方が検討課題として挙がっている。特に5歳以上の児童発達支援の受け入れ先が確保できるか、相応しい支援先に繋げるために地域事業所との連携強化が必要となる。</li> </ul>
<p>保育課入園相談係</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 令和8年度の入園全体数とケア・配慮が必要な児童数は、例年と同数・同程度の見込み。子どもの全体数は減少傾向だが、発達に関しては、保護者の関心が高まり、診断に行くケースが増加。</li> <li>② 医療的ケア児の入園状況については、体制面や知見不足等の課題があり、保護者の入園希望に100%は応えられていない状況。</li> <li>③ 児童発達支援の併設園(私立)について、保育課として推奨しているわけではないが、既に検討している園があるという情報あり。来年度からは保育園の空きを活用した誰でも通園制度が開始する予定。</li> <li>④ 再整備計画に挙がる区立保育園12園については、施設配置や保育需要等を踏まえ、再整備だけでなく、再配置も含めた検討が行われている。</li> </ul>
<p>代々木の杜ピア・キッズ(児童発達支援センター)</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 相談や利用児童数の増減や内訳について、相談は、昨年度:169件⇒今年度:177件と増加。児童発達は、昨年:91人、今年:81人(内訳:ポルテ52人、ピッコロ29人)と減少傾向、年度を重ねるごとに減少。放デイは、45人前後とほぼ変わらずの推移。</li> <li>② 「ゆるっと〜くひろば」の実施状況について、鳩森子育て支援センターは応募がなく中止。広尾子育て支援センターは1名の参加。3月11日(水)に中幡・笹塚子育て支援センターにて実施予定。ペアレントメンター養成研修を2月21日(土)地域交流センター代々木の杜交流室Bにて開催予定。受講者5名、講師は東京未来大学の荻野昌秀先生。5月頃に2回目の研修実施。2回修了した方を「ペアレントメンター」として登録し、6月以降から活動を開始する見込み。</li> <li>③ 児童発達支援センターとして、小学生の子を持つ先輩保護者とのお話会、学校のこと等の情報提供を行う。訪園回数は増えてきているが地域との連携という意味ではまだ少ない。課題として「地域との情報共有」が挙がっている。</li> </ul>

- ④ 児発・放デイ等を通じて区内事業所と連携し、「ゆるっとーくひろば」「療育講座」の周知・案内。
- ⑤ 保育所等訪問支援事業は一定の認知が進んでいる一方で、事業として提供したい支援内容と園側が求めている支援との間にズレがある。保育士不足、配慮を要する子どもの増加等、職員の疲弊感が強まる。引き続き、園に寄り添った「伴走型支援」が必要となる。

教育センター

- ① ネウボラ内での連携について、子ども発達支援センターや中央保健相談所と連携し、転学相談を行う場合もある。また、不登校等の背景に家庭環境の影響が疑われる場合は、子ども家庭支援センターに繋ぎ、早期支援に努めている。
- ② 特別支援教育係での各学校への介助員・支援員の配置は、やや増加傾向。学校から年度当初の配当時間では支援員が不足し、追加配当を希望される場合もあるが、年間の予算に限りがあり、すべての要望に応えることはできない。
- ③ 就学支援委員会での判定とは異なる学びの場を選択する場合、「継続相談」の扱いとなる。各児童の状態に応じて、介助員等を配置する場合がある。
- ④ けやき教室を利用するにあたり必要となる手続き等は、保護者が教育センターもしくはSSWに相談、けやき教室を見学・説明。体験入学後、面談(保護者・本人・けやき教室)。区内在住、登校が難しい普通級の小中学生が対象。土曜ホットスペースの利用に手続きはなし。利用条件は、区内在住・在学の中中学生から青少年(18歳程度)を対象。
- ⑤ 情緒学級を利用することで特性により登校渋り、活動に参加できない児童の登校が安定、通常級との交流学习を通じて運動会に参加できたという報告あり。一定程度のニーズはあるが、学級の設置や入級については慎重な検討が必要。
- ⑥ 放課後クラブでは支援学校在籍児を一定数受け入れ。急増する見込みはないが、増加傾向。受け入れに際しては、保護者面談時にて対応。【地域学校支援課より】

参加者からのご意見・感想など

各カテゴリー(年齢別)のライフステージに応じた課題・相談内容・支援に関する一覧情報が不足しているため、必要な支援にたどり着きにくい現状がある。情報を網羅したツールがあると保護者の負担軽減につながるとの意見が挙がった。

次回子ども部会、3月12日(木)予定

## 1. 近況報告から

ガイヘル講座 来年度要項改正 精神障害の人たちの支援を盛り込むようカリキュラム変更  
グループホーム事業所の困りごとが多く出てきている  
高齢期の相談 移行が難しいケースが出ている  
学齢世代と高齢家族の世代で、相談やサービスの利用についての考え方に大きな違いが出てきている  
不登校が増えてきている  
団塊の世代のお子さんたちが高齢期にさしかかり、高齢化の進み方が早く対応に困っているケース  
相談につながらないケース

## 事例について

高齢期、介護保険への移行に関して3つのケースが提供された  
介護保険と障害福祉サービスの併用をしている精神障害のある方のケース  
本人、保護者とも高齢で保護者にも支援が必要ではと思われるケース  
地域包括への相談から、青年教室を紹介されたケース  
→早期からの移行に向けての調整、障害サービス担当者の伴走、高齢サービス提供側の障害福祉サービスの理解の必要などが確認された

## 2. モデルを使った事例検討について

違う暮らし方、違うサービスもあるということを醸成していく必要  
50歳代の高齢サービスの移行期にあたる人  
住まいの場を変えようとしている人で探してモデルとして検討する